

霞城学園通信

平成29年度 第3号 （通巻第329号）
発行／山形県立霞城学園高等学校ⅠⅡⅢ部

創立20周年記念式典

6月10日（土）、来賓や同窓生の方々に多数御臨席いただき、山形テルサを会場に創立20周年記念式典が挙行されました。

校長式辞で浅黄喜悦校長は、本校設立の経緯と趣旨を説明した後、校歌、校章、「学園生活宣言」、そして、創立十周年記念式典で発せられた「霞城学園高等学校未来宣言」に触れながら、「個性」「創造」「挑戦」「継続」など、本校が目指すところを在校生に示しました。その後、全国定時制通信制体育大会における陸上競技、卓球団体・個人での優勝を初めとする部活動での実績、全国高校総合文化祭での活躍、県最優秀賞など生活体験発表会での入賞、植樹プロジェクト～福島に桜並木を～を初めとするボランティア活動等、生徒の活躍を振り返りました。そして、学園生活を経て道を切り拓き、二十年間で巣立った生徒 2530 名が各方面で活躍しているという実績は、「希望のつばさ」に力を与えるべく教職員と生徒が一丸となって努力した成果だと述べました。また、この二十年間に生じた、学校を取り巻く急激で大きい状況の変化に伴い、本校が最も太い柱として据えなければならないこととして「キャリア教育の充実」を挙げ、本校の「キャリアサポート・プロジェクト」の多角的な取り組みを紹介しました。さらに、新たな成果をこれまでの蓄積と融合させ、不断に改良を加えながら「霞城スタンダード」として確立し、生徒それぞれの自己実現への過程に寄り添い、社会生活を自立的に送るための土台作りを支え推進していく、と述べました。



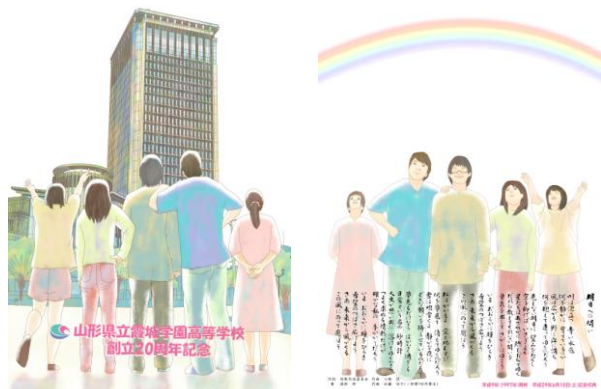
次に、実行委員長である同窓会長 佐藤 大様より御挨拶をいただきました。霞城学園で学ぶことができた喜びと、同窓生としての霞城学園への思いを語って下さいました。また、来賓を代表して、県教育委員会教育委員 森岡雄一様、山形市長 佐藤孝弘様より御祝辞を頂戴しました。本校への期待が込められた祝辞に生徒・職員一同、未来への決意を新たにしました。そして、Ⅱ部生徒会長 前川展陽君による生徒代表の言葉がありました。霞城学園での充実した生活や友人と笑い合う毎日、そして、学校生活を通しての自分の変化や成長について語ってくれました。また、霞城学園高校の「学園生活宣言」に触れ、その精神を示すものとして学校行事について述べました。体育祭や霞城祭の企画・運営を生徒が自分たちで行っていること、こうした行事一つ一つを成功させることが、先輩方が作ってきた伝統を守り、発展させ、次の

世代へバトンを渡すことになると感じていると語りました。そして、充実した学校生活は先生方、同窓生の先輩方、地域の方々、家族など、多くの方々の支えで成り立っている、と感謝の意を表し、今後霞城学園高校がますます発展していくよう在校生一同努力していく、決意を述べました。

記念品として学校に看板用手動バトンが贈呈されました。また、同窓生の佐藤咲子さんがデザインしたクリアファイルが列席者へ贈られました。在校生と卒業生が霞城セントラルと空にかかった虹を眺め、在学中の思い出や成長した自分を振り返るというコンセプトで作成されたものです。校歌にもある「空を仰ぐ」や「虹」は霞城学園の希望に満ちた未来を象徴するもので、これまでの、そしてこれからの霞城学園に思いを込めて制作して下さったそうです。

また、同窓生としての霞城学園への思いを語って下さいました。そして、Ⅱ部生徒会長 前川展陽君による生徒代表の言葉がありました。霞城学園での充実した生活や友人と笑い合う毎日、そして、学校生活を通しての自分の変化や成長について語ってくれました。また、霞城学園高校の「学園生活宣言」に触れ、その精神を示すものとして学校行事について述べました。体育祭や霞城祭の企画・運営を生徒が自分たちで行っていること、こうした行事一つ一つを成功させることが、先輩方が作ってきた伝統を守り、発展させ、次の

世代へバトンを渡すことになると感じていると語りました。そして、充実した学校生活は先生方、同窓生の先輩方、地域の方々、家族など、多くの方々の支えで成り立っている、と感謝の意を表し、今後霞城学園高校がますます発展していくよう在校生一同努力していく、決意を述べました。



校歌にもある「空を仰ぐ」や「虹」は霞城学園の希望に満ちた未来を象徴するもので、これまでの、そしてこれからの霞城学園に思いを込めて制作して下さったそうです。

記念公演「地球のステージ」

企画・出演 桑山 紀彦氏

精神科医・心療内科医・医学博士

NPO法人「地球のステージ」代表理事

創立記念式典に続いてNPO法人「地球のステージ」代表理事の桑山紀彦氏による記念公演が行われました。桑山さんは、タイ・カンボジア国境のキャンプを皮切りに、湾岸戦争後のイラク、ソマリア、旧ユーゴスラビア、カンボジア、東ティモール、パレスチナなどで医療救援活動を行っている他、地震等の緊急医療救援、被災者の心のケアにも携わっていらっしやいます。2011年3月の東日本大震災では自ら被災しながらも、震災翌日から2ヶ月間、24時間体制で診療を行われました。

今回は、「地球のステージ」6部作の中の入門編とも言える「地球のステージ1」の公演をお聴きしました。

最初に桑山さんの撮影による世界各地の風景映像が流れました。世界五大陸の山々と美しい自然の姿が桑山さん演奏のオリジナルの曲に乗せてスクリーンに映し出されました。初めて訪れたインドの旅、アフリカの広大な自然、アラスカのオーロラ等の映像が桑山さんの語りとともに紹介され、その美しさに目を奪われました。その後に語られたフィリピンでの少女との忘れられない出会い、貧しい村で育ちながら家族の協力のもと大学で学ぶミャンマーの少女の姿から、本当の豊かさや教育の力、学ぶことの意味を考えさせられました。最後に東日本大震災の被災地、名取市の閑上地区で現実に向き合いつらい体験を乗り越え前進しようとしている方々の姿が伝えられました。「向き合うことで人は強くなり、前に進める」「人とつながることで元気がよめる」という桑山さんの言葉が印象的でした。



〔生徒の感想〕

○ミャンマーに住んでいるイエイエさんの考え方、閑上のえりちゃんの勇気、フィリピンのごみの山に住む子ども達のごみを担いでいる背中、何だかヒーローのようにかっこよく見えました。自分と同年代や年下の子ばかりなのにしっかりしてる、とも思いましたが、賢いから、えらいからすごいということではなく、その子達が強いからすごいんだと思いました。強いから現実としっかり向き合って踏み出せるし、強いから人に優しく出来る。人が尊敬できる生き方をするのに、年齢は関係ないと学ばせていただきました。

○スクリーンいっぱい広がる映像の全てに「生命」を感じま

した。国、町、村などの人々が住む場所はもちろんですが、山、海、空、月、星などの自然が作り出す環境の中に私達人間が生きているのだと実感しました。世界や立場によって暮らし方も、暮らす環境も、暮らす場所も変わってきますが、今を精いっぱい「生きている」という事は皆同じなのだと思います。

○津波や地震で家族を失った方の話を映像で見た時に、今この瞬間は当たり前じゃなく、今この瞬間を大事にしなければいけないと思いました。なぜなら、人は今日が来ること、明日が来ることを当たり前と思うからです。当たり前と思わないことで、伝えたいこと、言いたいことを、人はちゃんとどんな形でも言葉にすべきなんだと改めて気づかされました。



この公演についての記事を桑山さんが、「地球のステージ」のブログに載せていらっしやいます。

<http://blog.e-stageone.org/>